

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 18 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520449

研究課題名（和文）台湾客家語海陸方言の記述的研究

研究課題名（英文）The descriptive research of Taiwanese Hoiliuk Hakka

研究代表者

遠藤 雅裕 (ENDO MASAHIRO)

中央大学・法学部・教授

研究者番号：10297103

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は以下の2点である。(1) 音韻・語彙・文法の記述。(2) 漢語系言語（中国語方言）および東アジア・東南アジアの孤立語における当該言語の位置づけを確認。具体的には、すでに調査済みの音韻および語彙資料については記述の精緻化をはかり、また文法については、主として動詞+補語構造と動詞連続の関係、アスペクト、モダリティについて記述した。これらの考察を通して、当該言語の統語的特徴は、北方漢語と東南アジアの孤立語の中間にあることを確認した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is the following two points; (1) to describe the phonological system, grammar and vocabulary; (2) to make sure the position of this language in Sinitic languages and other isolating languages of Southeast Asia. In this research I elaborated the phonological and lexical materials which I had already surveyed. And I mainly described the verb-resultative construction, aspect and modality. Finally I pointed out that this language stand at the intermediate between the northern Sinitic languages and the isolating languages of Southeast Asia syntactically.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語学

1. 研究開始当初の背景

本研究の発端は、研究代表者が中央大学の在外研究制度を利用して、台湾の国立清華大学に滞在中であった2005年4月～2006年3月に行なった台湾客家語海陸方言（以下「海陸客家語」と称す）の音韻および語彙調査を

基盤としている。この時点では、語彙調査までで時間切れとなってしまった。文法面の詳細な調査を行なうことが不可能となったため、記述資料としては不十分なものとなってしまう。

また、この時期以降、台湾では台湾客家語

についての研究成果が陸続と発表され始めていたが、海陸客家語については、まとまった研究成果が発表されていなかった。

そこで、近い将来消滅の危機が指摘されている台湾客家語の、なかでも海陸客家語の記述研究を完成させる必要性を感じるようになった。また、海陸客家語についての研究を進める中で、特に統語面について漢語系言語（中国語方言）の多様性を確認する作業も必要であることを痛感していた。

このような経緯から、本研究に着手した次第である。

2. 研究の目的

本研究では、海陸客家語の音韻・語彙・文法の記述、および漢語系言語をはじめとした東アジア・東南アジアの多様な言語環境における当該言語の位置づけの考察を主目的とする。具体的な研究目的は以下の3点である。

(1) 調査済み資料の整理と確認

音韻・語彙について確認調査を行い、記述内容を精緻化する。

(2) 文法記述の充実

特に「動詞＋補語（結果補語・方向補語・状態補語など）」構造と動詞連続の関係、およびアスペクト・モダリティ・ヴォイスなどについて詳細な調査・考察を行う。

(3) 客家語の位置づけに関する考察

主として文法面について、中国東南部の漢語系言語（海陸客家語以外の客家語・粵語・閩語など）および中国南部から東南アジアに分布する孤立語と比較・対照をおこない、海陸客家語がこれらのなかでどのような位置をしめるか考察する。

3. 研究の方法

研究方法は、つぎの2つである。

(1) 実地調査および文献調査で音韻・語彙・文法に関するデータを収集する。実地調査では、一貫して詹智川氏にインフォーマントを依頼している。詹氏は1939年、現在の台湾新竹県新埔鎮の生まれであり、第一言語は海陸客家語である。なお、文献は主として以下のものを用いた。

劉楨文工作室(2000)『一日一句客家話－客家老古人言』。台北：台北市政府民政局。

詹益雲編(2008)『海陸客家語短篇故事第三集』。新竹：新竹縣海陸客家語文協會。

(2) 文法研究については、(1)で得られたデータ以外に、比較・対照のため、他の漢語系言語および東南アジアなどのその他の孤立語のデータを使用した。

4. 研究成果

以下、音韻・語彙・文法の順に記す。

(1) 音韻

声調・声母・韻母の記述を行なうとともに、同音字表を作成した。声調は7（陰平 53、陽平 55、上声 35、陰去 21、陽去 33、陰入 5、陽入 32）、声母は 20、韻母 58 である。なお、声調を音響音声学的な分析を行ない（表 1、表 2 参照）、聴覚的な記述を裏付けることができた（分析については高橋康德氏（東京外国語大学大学院）のご協力を仰いだ）。

表 1 舒声

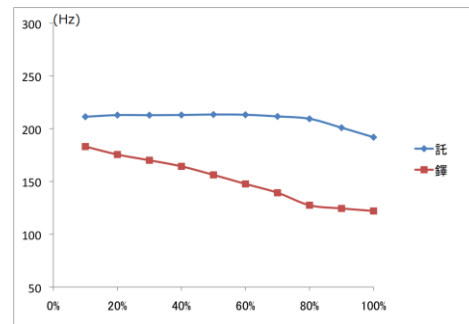
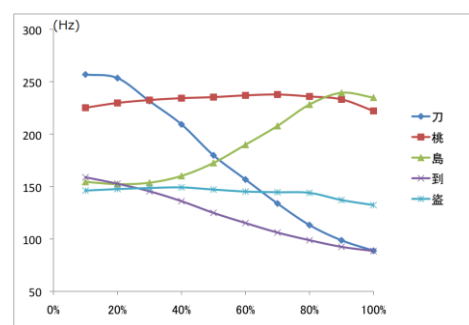


表 2 入声



そのほか、関連する音声現象（規則的な声調交替とそれが適用されない場合の条件・不規則的な声調交替・リエゾン・有声閉鎖音・鼻音化声母など）について考察した。

(2) 語彙

約 5000 語を収集・整理し、語彙集を作成した。配列は意味分類（自然現象、動物、植物...）順であり、IPA と漢字表記で記述し、日本語、中国語、英語で語釈を施した。さらに、すべてではないが、使用例も記述した。なお、語彙集は、現在のところ最終的整理がまだ終わっていない。

(3) 文法

文法については、主としてアスペクトと補語についてデータを収集し、分析を行なった。

① アスペクト

Comrie (1976) のアスペクトの分類を参考に、海陸客家語のアスペクトを完了相系列と非完了相系列に分類した。

完了相系列としては、完結相「掉 t^het⁵」（動詞後置）・既然相「了 le⁵³」（文末）の各標識が存在する一方、完了相については専用の標識が存在しない。動詞後置の完了相標識の「了」が発達している北方漢語と比較すると、海陸客家語の完結相標識は「掉 t^het⁵」はまだ語彙の特徴を有しており、北方漢語ほど文法化は進んでいない。よって、通時的には文末の既然相標識がまず発達し、動詞直後の完結相標識はアスペクト標識への文法化の途中にある可能性がある。

一方、非完了相系列としては、持続・進行相「□nen³⁵」（動詞後置）および進行相「坐□/□t^ho⁵³ { lia⁵⁵ / kai⁵⁵ }」（動詞前置）がある。なお、文法化の程度は「了 le⁵³」と「□nen³⁵」が相対的に高いのに対し、「掉 t^het⁵」および「坐□/□t^ho⁵³ { lia⁵⁵ / kai⁵⁵ }」は相対的に低い。

②補語

動詞に後置して、動詞が指示する語義に新たな情報を補う成分を補語という。本研究では海陸客家語の結果補語・方向補語・可能補語・状態補語・程度補語を認定・分析を行なった。

まず、結果補語と方向補語であるが、北方漢語を基礎にしている標準中国語の動詞(V)＋結果補語(R)構造は、複合動詞といえるほど融合しているが、海陸客家語では、VとR（方向補語含む）の間に、動詞の目的語・否定詞・モダリティ標識・使役標識など、さまざまな成分の挿入が可能である。つまり、Rの独立性が強く、事態との間の類似性が顕著である。このような特徴は、中国南方および東南アジアの孤立語にもうかがえる。このようなことから、VR構造を動詞連続の枠組みでとらえなおすことが可能であることを指摘した。

可能補語とは、動詞と結果補語・方向補語の間に「得」あるいは「唔」を挿入して可能・不可能を表わす文法形式である。海陸客家語では、この形式が目的語を伴う場合、つぎのような5つの組み合わせがある。つまり、V得OC（Cは結果補語と方向補語）、VO得C、V得CO、V唔OC、V唔COである。V唔OCという語順には、事態との間に類似性があることが指摘できる。

状態補語構造には、(1)V+「倒 to³⁵」+C、(2)V+「到 to²¹」+C、(3)V+Cの3種類がある。(1)は動作行為の状態を断言・描写する場合に、(2)は動作行為の状態を描写あるいは動作行為の到達程度を示す場合に、そして(3)は、動作行為の状態を描写する場合に用いられる。「到」「倒」については、新たな文法化の経路を提案した。なお、文法化については、動詞「到」（去声）から出発し、これが方向補語として用いられるところから動相補語

の「倒」（上声）が派生し、それぞれが状態補語標識になる可能性がある。

③モダリティ

動詞句や形容詞句に前置する「有」について考察を行なった。「有」は動作や状態がすでに発生していること、確かに存在していることを表わす標識であるが、その動作や状態が終わっているか否かについては言及していない。つまり、動詞について言えば、「有」は完了相標識とも非完了標識とも共起が可能だ。これは木村英樹(2006)が提唱する実存相（ある事態が存在している）をになう標識であるともいえる。

このような「有」は、北方漢語には見られないが、南方漢語（粵語・客家語・閩語）などには見られる。さらにはベトナム語などに、「有」相当する形態素が観察できる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的[to²¹]與[to³⁵]」、The paper to the proceeding of NACCL-22 and IACL-18、査読なし、〔掲載決定〕、2012
- ② 遠藤雅裕、「台湾海陸客語音系與有關語音現象」、『中央大学論集』、査読なし、第33号、2012、119-131
- ③ 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的完整體」、『臺灣語文研究』(臺灣語文學會)、査読あり、5-1、2010、37-52

〔学会発表〕(計5件)

- ① 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的動結述補結構」、The 19th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics、2011年6月11日、中国・南開大学
- ② 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的動結述補結構」、日本中国語学会第60回全国大会、2010年11月14日、神奈川大学
- ③ 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的[to²¹]與[to³⁵]」、The 18th Annual Conference of the International Association of Chinese

Linguistics、2010年 5月21日、アメリカ・ハーバード大学

④ 遠藤雅裕、「台湾海陸客語的 [to²¹] 與 [to³⁵]」、東ユーラシア言語学研究会第16回例会、2009年12月 5日、青山学院大学

⑤ 遠藤雅裕、「台湾客語海陸方言的完整體」、The 17th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics、2009年 7月 3日、フランス・EHESS

〔図書〕(計 2 件)

① 遠藤雅裕、「台湾海陸客家語の補語」、『文法記述の諸相』(中央大学人文科学研究所研究叢書 54)、2011、131-174.

② 遠藤雅裕、「台湾海陸客家語のアスペクト体系」、『現代中国文化の光芒』(中央大学人文科学研究所研究叢書 49)、2010、25-64

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 雅裕 (ENDO MASAHIRO)
中央大学・法学部・教授
研究者番号：10297103

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：